

武蔵野日曜集会

福音の焦点

――ガラテヤ書2章――

1975年11月16日(武蔵野)

小池辰雄

律法の奴隷 キリストの自由 福音の真理 キリストが神を信じたその信 無信の信、絶信の信
キリストの信によって 無の力 ドラマティックな構造 信に対するに信をもって 逆
徴、逆写 十字架・復活・聖霊の事態 キリストわがうちに在りて生き給う

【ガラテヤ2】

1その後十四年を歴てバルナバと共に、テトスをも連れて、復エルサレムに上れり。2我が上りしは黙示に因りてなり。斯て異邦人の中に宣ぶる福音を彼らに告げ、また名ある者どもに私かに告げたり、これは我が走ること、又すでに走りしことの空しからざらん為なり。3而して我と偕なるギリシヤ人テトスすら割礼を強いられざりき。4これ私かに入りたる偽兄弟あるに因りてなり。彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺い、且われらを奴隷とせん為なり。5然れど福音の真理の汝らの中に留らんとために、我ら一時も彼らに譲り従わざりき。6然るに、かの名ある者どもより――彼らは如何なる人なるにもせよ、我には関係なし、神は人の外面を取り給わず――実にかの名ある者どもは我に何を加えず、7反つてペテロが割礼ある者に対する福音を委ねられたる如く、我が割礼なき者に対する福音を委ねられたるを認め、8(ペテロに能力を与えて割礼ある者の使徒となし給いし者は、我にも異邦人のために能力を与え給えり)9また我に賜りたる恩恵をさとりて、柱と思わるるヤコブ、ケパ、ヨハネは、交誼の印として我とバルナバとに握手せり。これは我らが異邦人にゆき、彼らが割礼ある者に往かん為なり。10唯その願うところは我らが貧しき者を顧みんことなり、我も固より此の事を励みて行えり。

11然れどケパがアンテオケに来りしとき責むべき事のありしをもて、面前これと諍いたり。12その故に或る人々のヤコブの許より来るまでは、かれ異邦人と共に食していたるに、かの人々の来りてよりは、割礼ある者どもを恐れ、退きて異邦人と別れたり。13他のユダヤ人も彼とともに偽行をなし、バルナバまでもその偽行に誘われゆけり。14然れど我かれらが福音の真理に循いて



正しく歩まざるを見て、会衆の前にてケパに言う『なんじユダヤ人なるにユダヤ人の如くせず、異邦人のごとく生活せば、何ぞ強いて異邦人をユダヤ人の如くならしめんとするか』、¹⁵我らは生うまれながら来のユダヤ人にして罪人なる異邦人にあらざれども、¹⁶人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。律法の行為によりては義とせらるる者、一人だになし。¹⁷若しキリストに在りて義とせられんことを求めて、なお罪人と認められなば、キリストは罪の役者なるか、決して然らず。¹⁸我もし前に毀こぼらしものを再び建てなば、己みずから犯罪者たるを表す。¹⁹我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。²⁰我れキリストと偕ともに十字架せられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり²¹ 我は神の恩恵めぐみを空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然いたずらなり。

● 律法の奴隷

今日はガラテヤ書の第2章に入るわけです。「福音の焦点」と題しました。

1 その後十四年を歴て

パウロは1章18節で、「その後三年を経て」と書いてあるので、合わせると彼がダマスコ途上でキリストに撃たれて17年ということになりますが、学者によつてはそう勘定しない人もあるけれども。

バルナバと共に、テトスをも連れて、復またエルサレムに上のぼれり。

その前にちよつとエルサレムに行きましたが、使徒たちとは別に信仰についてそう語り合つたわけではない。そこで、「また」と書いてある。

2 我が上りしは黙示に因りてなり。

表向きはアンテオケの教会から遣わされたことになつてはいるようですが、パウロが動いたのは黙示によつたと。使徒行伝15章1節を見ると、

「¹或る人々ユダヤより下りてくだ

というのはアンテオケにやつて来て、

兄弟たちに『なんじらモーセの例に遵したがいて割礼を受けずば救わるるを得ず』と教う。²ここに彼らとパウロ及びバルナバとの間に、大なる紛争と議論と起こりたれば、兄弟たちはパウロ、バルナバ及びその中の数人をエルサレムに上らせ、此の問題につきて使徒・長老たちに問わしめんと定む。』(使徒行伝



15・1～2)

というのがこれです。

斯^{かく}て異邦人の中に宣^のぶる福音を彼らに告げ、また名ある者どもに私^{ひそ}かに告げたり、

もちろん、キリストの直弟子たちです。「ウルアポステル」「原使徒」です。「ひそかに」と言っても、個人的にということ。

これは我が走ることに、又すでに走りしことの空^{むな}しからざらん為なり。

というのは、伝道のために走り回りましたから、それが誤解を受けないようにと、大事なことをパウロは言っている。

3 而して我と偕なるギリシヤ人テトスすら割礼を強^しいられざりき。

テモテは割礼を受けましたけれども。それはユダヤ人を躓かせないためにということが使徒行伝16章に書いてあります。

4 これ私^{ひそ}かに入りたる偽兄弟あるに因りてなり。

まあよくあることです。ちよつと探偵的にやつて来ている、どんなことかといつて窺^{うかが}うようなご連中です。ユダヤ的な、まだ律法にこだわっているところの信徒たちがこの「偽兄弟」です。一種の律法主義者です。

彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有^もてる自由を窺^{うかが}い、
且^{かつ}われらを奴隷とせん為なり。

また律法の奴隷にしようとする。これはパリサイ派のご連中です。

●キリストの自由

ここでパウロが、

「我らがキリスト・イエスに在りて有^もてる自由」

と言う。これは非常に大事な言葉です。即ち、

「キリスト・イエスに在りて持つてゐる自由」

ということ。

「キリスト・イエスに在りて」

という言葉はいい加減な気持ちでクリスチャンが使っている場合が多いけれども。パウロの、

「キリストのうちに」(エン・クリスト)

という言葉はパウロの信仰の現実を一番端的に言つた言葉だと私は思っています。このことは、絶対にあなた方は忘れてはいかんし、また、その現実を現実としていなくては。

私は無教会時代に、「キリスト・イエスに在りて」なんていうことは、今のようないまに置いて受けとられていなかった。ということは、

「御霊に在りて」



と同じことなので、御霊が内住してなくて、「キリスト・イエスに在りて」なんていうことは空言にすぎない。そういう意味において、本当に自由であるということは、キリストと一つになって、キリストの中に、キリストの懐の中に入っていないければ、本当の自由はない。イエスが神の懐に在って、父の懐に在って自由であった。我々はこの贖い主キリスト・イエスの中に在って自由である。今、普通に自由なんて言われている自由はちつとも自由ではない。

『クリスチャンの自由について』というルターのあの宗教改革の本は、ちょうどこちらの親鸞の『歎異抄』みたいなものです。東と西の、歎異抄とルターのあの本は仏教とキリスト教の――今日は「福音の焦点」と題しましたが――焦点的な珠玉の文字です。ルターが近世の鐘を鳴らしたその自由の鐘は、

「キリスト・イエスに在っての自由の鐘」

である。それが完全に、キリストがどこかへ行ってしまったて、人間中心の自由なんてなことになっているから、ちつとも自由でないことは事実が証明している。このことはもうはつきりと証言しなければならないことです。

この律法から解き放されたパウロがあれば律法的な男で、律法の義については責むべきところなしというチャンピオンであった。それがこの律法の義を捨てたんですから。そして、

「キリストの義におけるところの自由」

を新しく賜^{たまわ}ったわけです。この頃よく、「獲得する」とかいう言葉を使いますが、我々は自分で得るんじゃない。これは賜^{うかが}ったものです。

それを窺^{うかが}って、またこの律法の奴隷にしようと思った。ユダヤ人中のユダヤ人がこれを完全に超克して、乗り越えてしまつて、そして、本当に世界的な使徒となつたわけですから。「諸々の民族の使徒」という言葉がパウロのためにあるくらいです。

5 然れど福音の真理^{まこと}の汝^{とじま}らの中に留^{とど}まらんために、我ら一時も彼らに譲り従わざりき。

「留まる」というのは、「いつまでも消えないで留まつている」という非常に強い言葉です。どうにも、このことは何としても譲るわけにいかないと。キリストの自由ですからね。

キリストは神に在って本当に自分を明け渡していた。これが「無者」と申し上げるわけです。彼は完全な無者であつたので、完全な「無限無量者」としての自由を神に在って動いていた。風に乗って自由に飛びあるく鳥のようなものです。そういう自由を何と代えることができるか。しかも、その自由の内容は御霊でありますから。御霊を何ものとも代えるわけにいかないというわけです。



●福音の真理

6 然るに、かの名ある者どもより――彼らは如何なる人なるにもせよ、我には関係なし、神は人の外面を取り給わず――^{かかわり}実にかの名ある者どもは我に何を加えず、^{かえ}7 反つてペテロが割礼ある者に対する福音を委ねられたる如く、我が割礼なき者に対する福音を委ねられたるを認め、

その点で、このキリストの直弟子たちは何も私に加えているわけではない。条件付けているわけではないと。「名ある者ども」というのは、そういった使徒たちです。「何も加えず」というのはまた、「彼らから何をも貰ったわけでもない」という二重の意味があるらしい。反つて、ペテロはユダヤ人への使徒、自分は異邦人への使徒と、これはもうキリストの示しに与かつていますから。

8 (ペテロに能力を与えて

これはもちろん、御霊の力です。御霊のエネルギーを与えて、

割礼ある者の使徒となし給いし者は、我にも異邦人のために能力を与え給えり) ^{めぐみ}9 また我に賜りたる恩恵をさとりて、柱と思わるるヤコブ、ケパ、ヨハネは、

ヤコブ、ペテロ、ヨハネはキリストの直弟子の三人ですね。変貌の山でもいつもキリストに一番近くいたのはこの三人です。

^{まじわり}交誼の印として我とバルナバとに握手せり。これは我らが異邦人にゆき、彼らが割礼ある者に往かん為なり。

そのことをお互いに認め、協力しようという意味の握手です。

^{もと}10 唯その願うところは我らが貧しき者を顧みんことなり、我も固より此の事を励みて行えり。

「その」というのは、彼らが願うところは、我らが貧しき者を顧みること。この「プトーコイ」という字が、あの「霊の貧しい」というのと同じ言葉が使つてある。受ける方には何にも条件がいない。むしろ本当に、

「あれども無きが如く、無けれどもあるが如く」

とパウロが言っている、相対的なものに対して問題を感じない、それを問題としない、そういうようなのが本当の「貧しさ」ということ。また、本当の豊かさでもあります。

^{まのあたり}11 然れどケパがアンテオケに來りしとき責むべき事のありしをもて、面前これと諍いたり。

これはペテロはやりそこなつた。

¹²その故に或る人々のヤコブの許より来るまでは、かれ異邦人と共に食しいたるに、

愛餐のごとくに食事を共にしていた。



かの人々の来りてよりは、割礼ある者どもを恐れ、
まあ、ペテロとしては多少、躓かせないという気持ちもあつたんでしようけれども。
退きて異邦人と別れたり。

ペテロがはつきりこれをやると、割礼ある者たちにペテロは誤解されるという面もあつたかと思う。けれども、パウロははつきりと、あれはダメだと。また、福音の掴み方からいえば、何といつても、パウロの方が先へ進んでいます。そういう、まだ多少、ペテロでは始末のついてない面があつたかと思われまふ。

13 他のユダヤ人も彼とともに偽行をなし、バルナバまでもその偽行に誘われゆけり。14 然れど我かれらが福音の真理に循いて正しく歩まざるを見て、会衆の前にてケパに言う

パウロは伝道したときに、大いにシナゴグでもって語りましたから、相手はユダヤ人もいくらでもいるわけです。そこでも彼ははつきりと水を割らずにやってきましたから、ペテロもそうしてもらいたい。そして、今までのユダヤ人も本当の意味において福音に入れてやりたいのに、まだそこところに多少、因習的な旧いものに引掛かっているのは何ごとだと。それは正当にパウロの方が正しいわけです。

『なんじユダヤ人なるにユダヤ人の如くせず、異邦人のごとく生活せば、何ぞ強いて異邦人をユダヤ人の如くならしめんとするか』
とんでもないではないか、というわけです。

●キリストが神を信じたその信

15 我らは生来のユダヤ人にして罪人なる異邦人にあらざれども、

割礼を受けていない、しかもまた、神を信じていないというような気持ちで、この「罪人」という言葉を使っているようですが。

16 人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。

今日は、この16節以下が極めて大事で、お話の中心はそこへいくわけです。

「律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由りて」

と訳してありますね。口語訳聖書には何と訳しているかな。

「人の義とされるのは、律法の行為によるのではなく、ただキリスト・イエスを信ずる信仰による」

と、やつぱりそう書いてある。ギリシャ語の原文によると、「キリスト・イエスを信ずる信仰」とは書いてない。

「キリスト・イエスの信仰によって」



とある。「信ずる」というような動詞的な表現はしてない。「ただキリストの信仰による」という。

「律法の行いではなくして、キリストの信仰による」

と、それでいいわけなんです、言葉の対句的な気持から言いましても。

この「キリストの信仰による」の「による」は「デア」という言葉ですが、これは「原因となっている」こと。

「キリストの信仰というものが元^{もと}になって、それによる」

と。だから、「キリストの信仰」という言葉は、「キリストを信ずる」という前に、「キリストの信、信仰」ということです。それはパウロはもちろん、「キリストを信ずる」という気持で全面的には言ったんでしょうけれども、その奥には「キリストの信」というもの、

「キリストが神を信じたその信が土台で、それと同じ質の信仰による」

ということです。

ところが、「キリストを信ずる信仰によりて」という訳し方は、何か信仰というものが行為に代わってきて、「信仰、信仰」と言う。これが無教会の癖なんです。

「キリストを信ずる信仰によりて」

というのを、塚本先生なんかも非常に強調しておられました。私は無教会の偉大な三先生の内村鑑三、藤井武、塚本虎二についてきました。この本(『無者キリスト』)の扉に書いたとおりです。もちろん、感謝している。けれども、無教会に私がいたときに、この「信仰」というものを何か自分の側にしてしまっている。だから、

「信仰を強くする。深める」

といって、自分の信仰というものを問題にして、その信仰がサムシングになってしまっている。「御霊」なんか全然出てこない。こういう信仰というものはパリサイ的な傾向になる。カルビンやルターにも多少その傾向がある。カルビンもルターもこれは御霊の経験をしている人ですよ――けれども、カルビンが自分の教敵を焼き殺したでしょ。とんでもないことです。ということは要するに、

「自分の信仰は正しい」

というのがサムシングになっている。そうすると、

「これでないものはけしからん」

と言って、宗教的な争いになる。争いになって、終いには宗教戦争式なことになる。ドイツの宗教戦争というのは大変なことですから。

宗教の世界でそういう角度は神・キリストに対す、熱心です。神・キリストに対する熱心で、自分の信仰を立てていく。これがパリサイなんだ。キリストが嫌いだったのはこれなんです、

「偽善なる学者、パリサイ人」

と言ったのは。パウロがそうだった。



「俺こそは」

と言つてやつてたんだ。ところが、キリストにパウロはユダヤ教的信仰をひっくり返された。どうぞ、皆さんは、その角度の誤りをしないようにしてください。「に対する」熱心はいかん。神・キリストに在つての熱心です。「に在つて」の熱心は決して人を審かない。これは人を救い上げていく。人にどう思われようが、どんなにけなされようが、一向差し支えない。「敵を愛する」とは、本当にそれを救い上げていくところの角度です。どういう人をも担つていくような信仰は、「に対する」熱心からは出てこない。

「神・キリストに於けるところのもの」

それが、

「エン・クリスト」

なんです。キリストの中にあれば、キリストと同じ愛が出てくる。同じ十字架の愛が出てくる。もちろん、正しからざることに對しては、はつきりと言います。言いますけれども、審くのではない。どこまでも相手を担つていく。パウロがはつきりと信仰の、賜つたところの信仰の事態をもつて戦つていった。戦つていくのは、敵を倒すために戦うのではない。敵を救い上げるための戦いです。そこに義と愛が一如になっている姿がある。

●無信の信、絶信の信

これが、その「キリストの信仰による」ということ。「を信ずる信仰」なんていうと、何かこっち側の信仰になつてしまう。私はこういう訳は危ないと思つている。「キリスト・イエスの信仰による」ということです。

「キリスト・イエスの信仰によつて」

と、それが簡単で一番いいじゃないですか。本願的な角度が出てくる。この「キリスト・イエスの信仰」は、

「キリスト・イエスの信によつて」

と、「仰」の字がなくなつていいんだ、「キリスト・イエスの信によつて」と。大体、「仰」という字は付けたります、「ピステイス(信仰)」という字は。全存在を投げかけている事態が「ピステイス」なんだから。「信」とは、自分を信じているのではない。自分の信仰なんて信じているのではないんだから。神・キリストという絶対者を無条件に受けとつて、その事態を「信」というので、こちら側の何ものでもない。

そこでやはり私は、

「信にも絶しなくてはいいかん」

と言う。「無信」と言うといけないから、そこは「絶信」と言いますけれども。「無信の信」と言つたつていいんだよ。無信の信、絶信の信だ。

「自分の信仰になんか絶しろ」



と。これは大変なことです、この世界は。(異言)。もう私はこれを言うと、中に聖霊が充滿してくる。そうでないとところに御霊は来ないです、自分の何かを立てているうちは。君たちは本当にそれを捕まえてもらわなくては。

そういう、キリストの信によって義とせられる。それはその事態が同時に義なんだ。「義とせられる」なんて言わなくなつていいんですよ、二段構えに。キリストの信の事態が直ちに義であり愛であるんです。親鸞やあの一遍上人の信仰の角度がこれですね。本当に如来の中に入った。

だから、親鸞の『歎異抄』をバルトが読んで、バルトの『ドグマテイク』の中に書いてある、「驚くべき信仰だ」

と言った。

だから、「律法の行為によつて」なんかでとても義とされるものではない。パウロは、初めは自分のそれで義だと思つていた。ユダヤ人は相変わらずそうだ。それ事態は悪くはない。けれども、これは人を審く。そして固くなる。

こないだ、無教会時代の写真が出てきた。昭和医専の第六回生の卒業アルバムがね。東大の前の古本屋に出ていたのを信雄が見つけて、

「とんでもないものを見つけてきた」

と言つて、それを買つてきた。そしたら、私の写真が出ていた。顔を見ると、やつぱり少し固いような顔している(笑)。だけれども、そこに書いてある文字が素晴らしい。「素晴らしい」というのは、私が書いたのではない。学生が小池先生のことを書いてある文字が。彼らは非常に感激したらしい。今、私が見れば、まだ固いんですけれども。

私はもう正直、20歳から一貫しますよ、方向は。私という人間は簡単だからね。いろんなものに興味は持つけれども、絶対に福音の場は取り去らないです。

●キリストの信によつて

「キリストの信によつて義とせられる」

と。そういうように、あなた方は読んでごらん。グツと力が強くなるから。「キリストを信ずる信仰によつて」というと、

「私はキリストを信ずる信仰をそれだけ持つているかな？」

なんて思う。そんなことを調べて百年たつたつてダメですよ。私はむしろ、これは誤訳と言いたいくらいです。ところが、無教会では、「信ずる信仰」ということをしよつちゅう言つてゐるんだな。おそらく今でもそうじゃないかな。

「律法の行為によつては義とされない」

と。本当の意味で、律法の行為を本当に全うしたのはキリストだけです。律法の根本をつかまえてしまったから。モーセの十誡よりも山上の垂訓の方が言葉が深い。モーセの十誡



は「なかれ」が多いでしょ。「何々するなかれ」と。キリストのはもつと肯定的にもつと深いものを語っておられる。

「律法は聖なるものにして」

という。本当は律法を本当に行ずれば生きるんです、永遠に。だから、律法を本当に行じたキリストは永遠の生命を持っていた。これはパウロがはつきり言っている。

「律法は聖なるものにして、これを行う者は生きる」

と。申命記にも書いてある。だから、ユダヤ人は一生懸命でこれを守って生きようと思っているわけだ。ところが、そういう守り方ではダメなんだ。神との本当に霊的な交わりは、預言者がその点をかなりいきました。けれども、預言者でも本当の世界ではない。だから、「このイエスの福音を信ずるいと小さき者も、偉大な預言者よりも大きい」とキリストは言われた。

「すべし、すべからず」の道德の世界は、日本ではこの道德の規準もなくなってしまった。ヨーロッパもだいたいぶおかしくなっているらしい。もう世界的に正直、精神的な危機ですよ、20世紀は。21世紀をどういうように迎えるか分からん。そのうちに天変地異もあるし、人災も出てくるでしょう。もう人間がこう驕^{おご}ってしまったら、とにかく、神仏の世界を無視したら、ダメになることははつきりしている。霊止^{ひと}でなくなってしまうから。霊止^{ひと}でなしという。「ひと」というのは霊が止まると書く。私はどこへ行っても、このことをはつきり言ってるんです。

「もともと日本人は、神霊の止まっているのを霊止^{ひと}と言ったんだ」と。大言海を見てみるというわけです。

●無の力

律法の行為によりては義とせらるる者、一人だになし。

これはみな肉であるからです。神・キリストを立てないのを「肉」と言います。自己がどんなに理想主義的に立派であつても、それはダメです。神・キリストを立てない世界は、道德的に立派であつても、それは「肉」なんです。「霊」ということは、神・キリストを立てる。神・キリスト中心でないものは全部これを「肉」という。どんなつまらない業でも、神・キリスト中心なら、これは「霊」なんです。雑巾掛けしてても、何してても、そのような魂、そのような心でやっていることは霊的行為なんです。いわゆる心霊的の霊ではないですよ。これはもう、

「義人なし一人だになし」

と、詩篇14篇の中にも出ている。これをパウロが書簡の中へ持ってきた。「お前の義は何とかよりも腐っている」なんて、イザヤ書の中にも出ている。

¹⁷若しキリストに在りて義とせられんことを求めて、なお罪人と認められな



ば、キリストは罪の役者^{えきしや}なるか、決して然らず。

そのとおり。17節はなおはつきり言ってますね、

「キリストに在って義とされんことを求める」

と。キリストに在ればもう、「義とされる」なんて言わなくても、それは自ずから義の世界です。御意を立てて、自分の意を捨てている世界。無我、無執の世界。我執の無い世界、執着の無い世界。これが「キリストに在る」ということです。そして、気持は楽でしょうがない。

キリスト・イエスに在って我々は根源的には義人である。西郷南洲が「敬天愛人」と言いましたが、本当の義人が人を愛することができると。

なお罪人と認められなば、キリストは罪の役者^{えきしや}なるか、決して然らず。

とんでもないと。律法を乗り越えているから。もちろん、人間ですから、相対的人間ですから、律法の光に照らせば、躓いたり転んだりすることもあるでしょう。けれども、その奥に、いつも前進してやまない、いつも展開してやまないところの魂である。ですから、三日月は満月に向かっていくわけです。消えていく月ではない。

18 我もし前に毀^{こぼ}ちしものを再び建てなば、己みずから犯罪者^{あらわ}たるを表す。

正にそのとおり。「前に毀ち」というのは、律法の世界をアウフヘーベンしてしまったから、これを本当に捨ててしまったから。

「これを塵芥^{ちりあくた}の如く思う」

とパウロはピリピ書で言っているでしょ。ところが、捨てたから、今度は本当に神さまは、パウロの一切のものを神のために、キリストの福音のために、すべてパウロに賜ったところの一切の力を、諸々の力を善用なさる。根源の力を与えて使いたもう。それがパウロの生涯をかけてのあの伝道であります。

この福音を受けて、いい加減な生き方をしたらつまらんですよ。また、それはできないはずです。この福音をただありがたがって安住したら、福音の生命はどこかへ行ってしまう。これは無^むの力^{りき}なんです。無力ではない。無という場の持つている無限無量の力^{りき}なんです、「無即無限無量」と申し上げているのは。キリストという一対^{たい}、一極が絶対であるから。一極絶対^{絶対}ということをやったでしょ。あなた方一人ひとりがその対極になるんです。こちら側の何ものでもない。何ものかであつたら、おかしいくらいなものです。みなこれ賜りたるものですから。賜りたるものを私してはいかん。

マルチン・ルターを動かしたのは、あの『テオロギア・ゲルマニカ』(ゲルマンの神学)という無名の人の作です。その本をルター自身が見つけた。発見した。その本の中で言っていることはやはりこの角度なんです。

『私は、私の、私に、私を』というその『私』の世界を抜けよ」

ということを繰り返し言っている。それは言葉だからね、使うことは仕方ないですよ。け



れども、それがいわゆる自己意識だったらダメだ。どこまでも神・キリストである、という角度を言っている。これはルターに非常に影響したところの神秘家の本です。

私は無教会時代に「神秘」という言葉を聞くとね、無教会の人たちは

「神秘は信仰に少し危険だ」

と言って、神秘という言葉を非常に避けた。ところが、ちゃんと聖書にあるじゃないですか。「奥義」と訳してある言葉「ミステリオン」というのは「神秘」という言葉ですよ。どうも無教会というのは妙な神経質なくだらないことを言っている。それは結局、聖霊の事態まで来ないことには、いくら聖霊について語ろうが、読もうが、ダメなんです、本当に体験せしめられるまでは。これは、魂の世界はごまかしがきかないから、はつきりしている。

あなた方は、なにも、特別集会を目当てにすることはないけれども、毎回毎日が特別集会だけでも、本当に毎回、自分を突き抜けて進んでいかなければ、集会なんてものは集会でないですよ。まあ、そうでないような集会が相当あるらしいけれども。

●ドラマティックな構造

その次、19節から終りまで。これは新約聖書の一番大事なところの一つです。これが「福音の焦点」と今日掲げたゆえんであります。

19 我は神に生きんために、

ということは、パウロにとっては、

「キリストに生きんために」

と同じことです。

「キリストは神か、神の子か」

なんて、馬鹿らしい議論をしている神学者がたくさんあるよ。どうして、ああいう形式的なことでもってやるかね。無教会が神学を嫌ったのも、意味があるけれども。私は本当の意味においては――「神学」と言わなくなつていいけれども――そのドラマティックな構造ははつきり掴んでいなくてはいかんと思う。

19 我は神に生きんために――キリストに生きんために――おきて律法によりて律法に死にたり。

パウロは律法によって生きようと思ったんですよ。ところが、律法によって自分が生きていたと思ったのは大間違いだと。これはパウロがロマ書7章で言っているとおりです。

「善を欲するけれども、どうしても善を為すところの力がない。我がうちに罪の法があった。ああ、我悩める人なるかな、この死の体^{からだ}」

と彼が言った。神の聖なる律法の前にはどうにもならん。

「汝殺すべからず」

とありますね。殺人はいかんと。誰も、それは殺人の犯罪は我々もしてないさ。だけれども、



「兄弟を憎んだ者は、殺したんだ」

とキリストが言われた。憎しみの気持を全然持たなかった人はあるかね。もう、殺人に通ずるところの心を持っている。ところが、律法の根本精神は、「汝は殺人せじ」とか、「殺人せじ」とか――あのヘブライ語の「ロー(しない)」という字は本来そうなんです。「アル(するな)」ではないんだから――断定しているんだ。だから、「私がお前の神」という言葉が後の方にあるんです、申命記なんか読むと。

「私がお前の神で、お前は私の民ではないか。それが殺人なんかできるか」
という角度の言葉です。だから、

「汝は殺人せず、殺人せじ」

といって、神さまの方から信じかかっている。これが神の信なんだ。神の信を受け損なっているのが、これが人間です。信に対するに信をもつてできない。律法を守るとか守らないとかいうことの奥の世界なんです。信に対するに信をもつて応えることができない。

人間関係というのはしよっちゅうこれをやっている。すぐ、

「あの人がどうだ。この人がどうだ」

と。

「自分の目の梁木^{うつぱり}を見ないで人の目の塵を見ている」

と、キリストがマタイ伝7章で仰っているとおり。相手に騙^{だま}されようが何しようが、信じかかっていると、

「こんなにあいつは私を信じてくれたか。悪かった」

と言って、反ってその人を救ってしまうわけですよ。

だから、信に対するに信をもつてできないのが「罪」ということです。「律法を守る、守らない」のもうひとつ奥の世界に、罪の事態があった。だから、律法が守れないんです。

「信に対するに信をもつてせず、愛に対するに愛をもつてせず」

というわけです。

●信に対するに信をもつて

アブラハムは神さまを信じたときに、どうだったんですか。もう子どもなんかできない。だけれども、

「神さまは仰った。自分なんか信じません。あなたの御言を信じます、受けとります」

と言ったら、

「神、これを義となしたまえり」

と。

「アブラハム、ヤーヴェーを信す」

という、



「アーメンと言いました」

という字です、あの「信ずる」というのは。アーメンと言いました。そしたら、神さまはこれを「義」(セデック)としましたという。即ち、信に対するに信をもつて応えた。これが「義」というわけです。

親が子どもを信じなくなったらどうなるんですか、親子の関係は。子どもがまた親を信じなくなったら、どうなるんですか。そういう信愛関係が大事なんだ。師弟の関係もそうです。今は寺子屋式な教育を必要とするときです。大掛かりなあれはダメなんです。だから、大学のゼミナールみたいなものは結構なんだ。そこで本当に火花を散らす。寺子屋教育に戻らなくてはいいかん。学校は大きくなればなるほどダメ。小さいほどよろしい。集会だってそうなんだよな。

「それでは、一人も連れて来ない」

なんて、そうじゃないですよ。困っている人、悩んでいる人、悲しんでいる人をいくらでも引つ張ってきてください。反抗するようなやつは、さっきの探偵みたいなやつは、連れてくる必要はない。あなた方の気分を乱すから。私は何が来たって平気ですけどもね。

信に対するに信をもつてできないのが「罪」という。信愛関係の破れているのを罪の事態という。だから、いわんや、律法なんか守れっこない。それで、

「律法に向かつて自分は死んでしまった」

と。よかった、パウロは死んで。しかし、この死んだのは、パウロは律法の世界で死んだと思つたのではないですよ、本当の生命の世界に入ったからです。

「律法によつて律法に死んだ」

というのはロマ書7章です。

●逆徴、逆写

20 我れキリストと偕ともに十字架せられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、

「我キリストと偕に十字架されたり。われ生く、されど最早我れにあらず」

というんです、直訳すると。

キリスト我が内にありて生き給うなり。

このガラテヤ書2章20節にもう、福音がはつきりと入っている。もう、何回言うか知りません。

「我れキリストと偕に十字架せられたり」

と。教会堂の上にはみんな十字架が付いているけれども、なんといつても、十字架は土台です。無教会でもさんざん十字架だ。悪くはないですよ。けれども、十字架が一種の気安めになってみたり。

「十字架とは何ぞや?」



と言ったって、これは答えは書きません。もの凄い内容を持つているから。ただ旧約聖書の、あの贖罪の羔羊――年に一回大祭司がやるあのこと――へブル書9章、10章に書いてある。このキリストが、いきなり天界に行つていい方が神さまから、

「お前は人の贖いのために、旧約聖書を本当に全うするために、十字架にかかれ」
と。ゲッセマネの祈りだ。

「神さま、この苦杯を何とかして取り去ってください。いきなり、天界に、あなた
のところへ行きたい」

と、キリストは初め言っている。けれども、「待て！」というわけです。

「自分がこの地上に遣わされたのは、実はこの十字架に架かるためである」

と。最後の終点が、キリストの地上の33年の生涯の終点は十字架なんです。安楽な墓場ではなかった。誰もこの十字架を分かつてくれる者はなかった。

私のこの本(『無者キリスト』)の「十字架」というところを皆さん読んでくださいね。私は一頁といえども無駄に書いてない。本当に打ち込んで読んでくださいよ。私は自分で読んで、そして、自分の文字と思つてないんですから。もうありがたくてしょうがない。どういうもんだかね、これ。

「民の長老たち、祭司長たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔をされ、弟子の長ペテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、極悪人と同列に置かれ、悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、荊の冠をかぶせられ、血の雫と汗にまみれ、傷だらけの軀にされ、侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ、髑髏の丘へと、ヴィアドロロサ「苦難の道」をよろめき辿りゆくイエス！

人間の、人類の、世界の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の悪魔的、地獄的、闘争的、攪乱の実相の逆徴が、イエスの十字架を負つこの姿に逆写されている。」

私たちは神の審判の前には立てない。みな地獄行きです。ところが、この地獄行きの二人の盗賊がいた。右と左に。これがまた素晴らしいコントラストをなしている。

「お前は神の子なら、私たちを救ったらいいだろう」

と、こっちは相変わらず傲慢だ。もう片一方は、

「私たちはさんざん悪いことをしたから当然だ。この方は何も悪いことなさつていらつしやらない。お前は神を畏れないか。み国にお入りになるとき、せめても、私を憶えてください」

と言った。この言葉をキリストは聞いた。

「私はお前と一緒に今日はパラダイスだ」

と。まっさきにパラダイスにキリストと共に行きました。これが福音です。碎けるか碎け



ないか。人類を二つにわけけるものはこれだけ。その他の一切のことではない。このことを十字架の両方の盗賊が表している。「これは盗賊ですから」ではない。我々がみな同じ罪びとである。

●十字架・復活・聖霊の事態 だから、

「我キリストと共に十字架せられたり」

と。何も私は十字架されていないのに、キリストは、

「みんな私が背負った。お前はもう無罪放免である」

と言われる。絶対恩寵じゃないですか。これ以上の恩寵があるですか。なぜ、いつまでも自分なんかを見てるんですか。相対的自己が何になるんですか。問題はもうすつ飛んでしまっている。これが無の境地なんです。禅宗やなんかの悟りの無もあるでしょう。けれども、この賜りたる無の世界、無我無罪の世界は、キリストはそこを真空にしておかない。本当に十字架を受けとれば、

「自分はもう生きていない」

とパウロが言っているとおりの。けれども、

「キリストわがうちに在りて生くる」

とは何ですか。キリストの霊が、キリストの生命がこの私の中に入ってきました。無即無限無量とは、この十字架・復活・聖霊の事態が私たちに賜るところのものです。これは、これでいいというところはない。死に至るまで、死を突破しても、その世界をどしどしと進んでいく。光が溢れてしょうがない。

私の庭にローレル(月桂樹)の木があります。棕櫚シュロの木もあります。この月桂樹と棕櫚の木は天に向かって葉を伸ばしている。下に垂れない。私はこのローレルの木の枝の姿が好きです。どこまでも、天に向かっていく。ある時、植木屋さんがこれを切ったから、とんでもない、この木は絶対に切らんでくれと。私は庭の木ひとつをも、そういうような気持ちで見ている。みな、讃美の姿で、限りなく天に向かって伸びていく。

「もう私は生きてなんかいませんよ。しかし、私の中のこの新しい生命はどうしてくれるか」

というんです、パウロは。

「キリストわがうちに在りて生くるなり」

と。それは無教会の人たちは、ある意味において、感情的にはそういう世界にもいたでしょう。けれども、そんなもんじゃないんです、この聖霊の生命の世界は。その点では、内村鑑三先生といえども、なおもつと、なぜパウロを本当に掴んでくださらなかったかと、私は言いたいくらいです。



今度の『無者キリスト』(小池辰雄著作集第1巻)の最初の「言い逆らい徴」の一文を書いたときに、手島さんが

「小池先生は内村先生、藤井先生を乗り越えた」

と私に葉書をくれました。手島さんはいつも私のことを「先生」と言っていましたけれども。しかし、手島さんとあの阿蘇の垂玉たるたまの――もうそれ以前に手島さんは経験しているんですけれども――今から25年前(1950年)の11月2日、3日の集会がもの凄い集会で、これを彼らはペンテコステと言っている。今年も、阿蘇と大阪と蔵王山の三箇所でペンテコステ25周年記念会をもの凄くやっている。彼らは本当に満たされてますよ。今朝、私は9時に行って、この『無者キリスト』を会場へ持って行ったけれども。10時半から始まるというのに、もう9時から来てますよ。そしてもう祈りの態勢に入っている。

とにかく、今の日本の精神状態は、小学校から大学に至るまで本当に魂の教育はない。だから、我々この福音に携わった者は、次の時代の人たちを本当に育て上げる義務と責任がある。どんなことがあっても絶対に屈しないところの、そういう魂をつくっていかなくては、もう福音が福音でないですよ。そういう、本当に終末的現実に来ているんです。私はことごとくそう思う。

この本は、本当に読んでくだされば、人は誰であつても虚心坦懐に読めば、おそらく驚くと思う。それでジリジリと展開するように私は祈ります。本が売れる売れないという、そんなことではない。そういう意味で、もうカイロスが、ギリギリのところが本当に来ている。これから25年ですよ、今は1975年だから。あと四半世紀。もう本当にキリストの生命力というものは凄い。あなた方は身体の中に本当にそれを感じていますか。青年諸君がそうでなかったら、しょうがないよな。私は永遠の青年のつもりなんだから。

●キリストわがうちに在りて生き給う

20 我れキリストと偕ともに十字架せられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。

という言葉は、我々のいついかなる時も、この告白が爆発するような事態でなくては。この御霊のキリストを何ものと代えることができるかと。何とかして、病んでいる人があつたら、本当に祈ってやりなさい。困っている人があつたら、本当に語ってやりなさい。遠慮なんかしているうちは、まだ本当に生きていないからです。生きていれば、遠慮なんかしているひまはない。

「あの野郎は少しおかしい」

と思われるくらいでいいんですよ。何もわざわざおかしい必要はありませんけれども。そのようにして、いかなる機会にでも語る。私は中学・高等学校でもはつきり言ってますから。まだ彼らはなかなか受けとりにくいですけども、しかし、今にその言葉が響くときがくる。



今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり。

「我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信受、受けとることによって生きていくのである」

と、更に細かく語っているわけです。「我を愛して」という。本当に私を救おうとなさつて、そして、私のために生命を捨て、贖罪してくださり、そして、律法から解放してくださり、御霊をもつて神の子としてくださる。

聖霊のことは第3章に出てきますけれども。パウロの書簡の中に、何と御霊のことがかくも散りばめられているかということに、私は聖霊を受けてから初めて気がついた。今まで何を讀んでいたかと思つた。

無教会の或る人から、注文書の中に、

「無者という言葉は何か聞き慣れない言葉だが、これをよく分かるように説明してください」

なんて書いてきた。何をぬかすかと。私は返事なんかやらない。無教会なんてものは、すぐそういう言葉のことでもつて何のかんと言っている。ダメだよ、そんな説明したつて分かりつこないよ、これは御霊を受けない限り。説明で分かるような世界ではないんだから。

^{めぐみ}
21 我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然なり。^{いたずら}

「我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは全く徒然である」

と。もう非常にはつきりしている。ユダヤ教のコチコチのチャンピオンであつただけ、パウロはこのことを言わざるを得ない。ところが、せっかく語つたのに、ガラテヤの諸教会の人たちがまた別な異なる福音に戻ろうとしているものだから、そこで、パウロがこのガラテヤ書でもつてまた巻き直しにかかつたわけですよ。

もう、ガラテヤ書2章19節以下のこの事態を本当に身につけてください。聖霊のことがこの文字の奥に隠れていますから。御霊が来なければ、これは読めなですよ。何か他に言うはずだったけれども、どこかへ行つてしまった。

